

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

父との別れ

百姓たちは、己に科せられた運命だと、ただ黙々と農作業に精を出したが、かつて夢が有った時のような輝きは、どこからも感じられなかった。

彌兵衛の父の宗因は、家正の亡き後、ひっそりと庄屋を務めた。必要なこと以外では、ほとんど外出せず、書物を読み耽る日々であった。十九歳の彌兵衛に庄屋の大役が回って来たのは、父の宗因の健康上の理由と政治向きのことを好まぬ宗因のたつての願いからだだった。

村が水害に遭う度に彌兵衛は、祖父の家正が言い残した

「川幅をもっと広げよ」

という言葉を考えて出し、心が逸った。それを諫めたのは、父の宗因であった。

「彌兵衛、おまえは、まだ若い。時期を待て。人間ものごとを興すには、時期というものがある。必ず、その時期がやって来る。今は、その時に備えて知識を蓄える時ぞ。今、蓄えておくことは、きつと役立つ時が来る。人間、進み始めたら決して、後戻り出来ぬことが有る。逸る気持ちだけで、中途半端なことをしてはならぬぞ」

彌兵衛は、この時期、父の宗因の勧めで、旅に出ることを心掛けた。

「見聞を広めよ」

という宗因の教えは、体が弱く、ほとんど外に出ることが出来なかった宗因自身の望みだったかもしれない。



画 寺戸良信

多感な青年期、彌兵衛が父から学んだことは多かった。

父の宗因が、この世を去ったのは彌兵衛三十三歳の時だった。

時は巡り、何度もの季節が通り過ぎた。

日吉村の日々は、自然に翻弄され、水害とその復旧の繰り返しであったが、彌兵衛の身の上に起きたいくつものことを除けば、村には大きな事件も無く、彌兵衛は五十歳を迎え庄屋としての務めを懸命にこなしていた。

家族は母親のサトの他に、妻のクニ、長男の勘六、長女のゆう、それに番頭の五郎太に囲まれていた。

彌兵衛と、その家族にとって、これから始まる人生を思えば、この数年が一番平穏な時だったのかもしれない。

六歳で水の事故に遭い、命を失った次男の文蔵の七回忌の法事を無事に済ませ、正林寺の住職と共に膳を囲んだのが元禄十五年（一七〇二年）六月二十七日だった。

朝から降り出した雨は午後になっても降り止まず、雨足は激しくなるばかりだった。

「元気のいい末っ子の文蔵さんが亡くなりなされたのも、こんな激しい雨の後でしたなあ。あれから、もう七年にもなる。早いものですねあ」正林寺の住職が、しみじみとした口調で彌兵衛に語りかけた。